２１世紀の日本のかたち（１０２）

２０１７年夏
—人間居住・地球共同体について考える

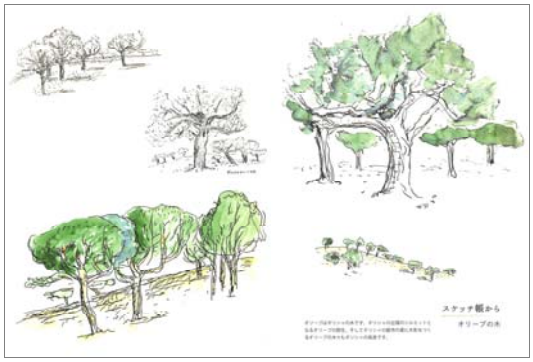
戸沼幸市
＜(一財)日本開発構想研究所 代表理事＞

１．ギリシャ人・ポソモポラスの死

私の住む都内の住宅団地にある欅の木々に今年の夏もミンミン蝉がここを先途と鳴いておりました。その最中、８月17日、私のところにギリシャから一通のメールが届きました。ＷＳＥ（World Society of EKISTICS・世界人間居住学会）の事務局長、パナイス・ポソモポラスの訃報を伝える秘書のアレックス女史からのものでした。ポソモポラスはここ数年体調を崩していましたが、92才でギリシャのオリーブの木々に包まれてこの世を去って行きました。

写真１ パナイス・ポソモポラス氏

図１ オリーブの木



（戸沼幸市スケッチ帳より）

パナイス・ポソモポラス（1925～2017）は建築家として出発し、1957年、ドクシアディス事務所に入所し、イラク住宅計画、ガーナのアックラ・テマ新都市のアーバンデザイン等に参加しております。1963年よりＡＣＥエキスティクス大学院においてエキスティクスの理論を講義。ドクシアディスの信任があって1966年以来、同大学院の主任、ＡＣＥ（Athens Center of EKISTICS）の所長、ＷＳＥの事務局長も務めました。ドクシアディスの死後、私財を投げ打って今日までＷＳＥを支え続けました。

ポソモポラスとは、私が早稲田大学の在外研究員としてギリシャのアテネに本拠を置くＷＳＥの研究所に在籍（1975～76）して以来、40年以上の付き合いになります。

ＷＳＥはギリシャ人、C.A.ドクシアディスが主導して、第二次世界大戦後に創設されたグローバルな視点、視野から「人間居住」を考える、学際的、国際的研究者集団で、現在も活動している学会です。創設者のドクシアディスは、私がギリシャ滞在中の1975年に62才で亡くなりましたが、ポソモポラスはドクシアディスの後を受けて、ジャクリーン・ティルウィット女史（元ハーバード大学教授）

と一緒になって、ＷＳＥのその後の展開に中心的に働いてくれました。

写真２ ジャクリーン・ティルウィット女史

ＷＳＥの年に一度の総会、研究会は、本拠地のギリシャのアテネをベースにして各国持ち回りで開催され、近年では2005年の日本・彦根集会、2008年の中国・南京集会（R11報告）、2009年トルコ・アンタルヤ集会（R23報告）、2010年インド・ムンバイ集会（R36、37報告）で行われ、いずれにも私も参加しております。これらの集会についての事務連絡とコーディネートは、ギリシャに本拠を置くＷＳＥ事務局であり、パナイス・ポソモポラスでした。

ＷＳＥでは各国持ち回りの理事、会長、副会長が選出され、日本からは磯村英一先生が会長（1969～1971）を務めました。日本のＷＳＥのメンバー、長島孝一・キャサリン夫妻、土井嵩司も、理事・副会長として学会の運営に貢献しましたが、私も一時、理事・副会長（1998～2001）に選出されて学会の運営に関わったことがあります。2001年のＷＳＥの集会では、アメリカ・ニューヨーク、9.11の衝撃的なテロ事件が起き、緊迫した雰囲気であったことを思い出します。現在、後藤春彦早大教授が副会長、関口信行君が理事の職にあります。

ＷＳＥも21世紀に入って地球における人間居住の問題がアジアと欧米と対照的な動きにあり、ポソモポラスも日本や中国からの発言を期待しておりました。日本側は一時期、磯村英一先生が中心となり、日本居住学会を設立して人間居住問題を国際的、学際的に追求した時期があります。その成果を1985年の筑波研究学園都市で開催された「科学万博 つくば ’85（国際科学技術博覧会）」（1985年3月～9月）でのシンポジウム「人間と居住」を、ＷＳＥの主メンバー、ポソモポラス達が参加しておおいに盛り上げたことでした。

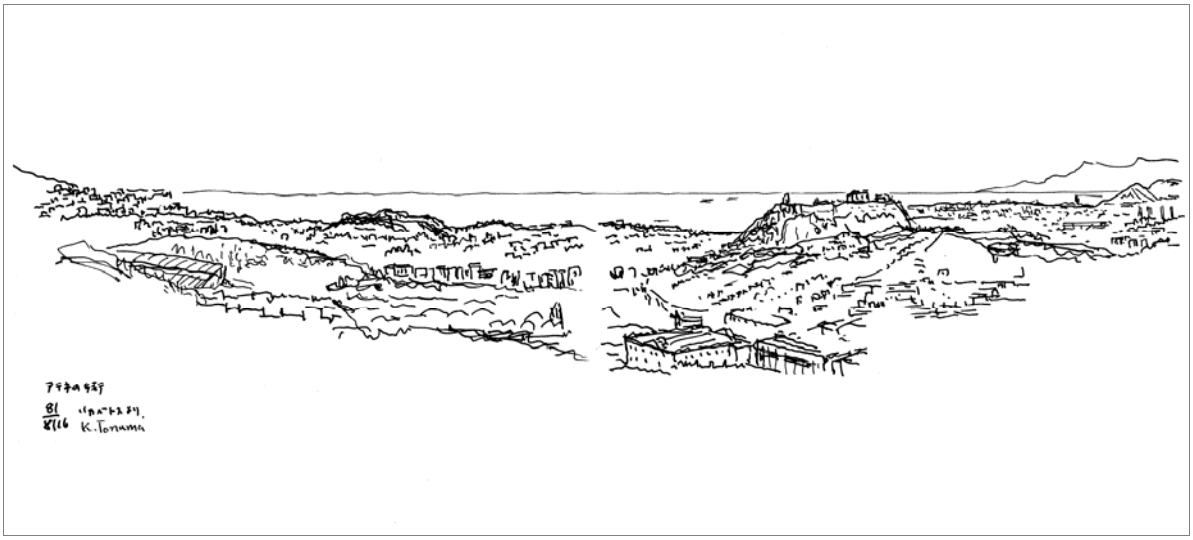
この時の活動記録は『国際シンポジウム EXPO’85 レポート』制作下河辺淳、日本科学技術博覧会協会が残っております。

私とＷＳＥ

私が初めてポソモポラスに会ったのは1967年夏、チェコスロバキアのプラハで行われたＵＩＡ（国際建築家連合）の会議を終えて、ヨーロッパのいくつもの都市を足の向くまま巡り歩いた時期、ギリシャはアテネのリカヴィトスの丘にあるC.A.ドクシアディス氏が主催しているＡＣＥを訪れましたが、その時に出会ったのがポソモポラスとドクシアディスの相談役、ジャクリーン・ティルウィット女史、元ハーバード大学教授（都市計画）でした。その時持参していたＵＩＡでの私のペーパー"Network City of JAPAN"を差し上げたのですが、これを早速、雑誌"EKISTICS"に掲載してくれました。この縁もあって、1975年の早大の在外研究の場所をギリシャのアテネに決めたことにつながりました。

リカヴィトスの丘から古代アテネのパルテノン神殿がくっきりと見えるのです。

図２ パルテノンのアテネの街



（戸沼幸市スケッチ帳より）

ギリシャではアテネにあるＡＣＥに籍を置き、ここをベースに人間の住環境に関する諸問題を研究しました。ＡＣＥは、住宅から都市−地域−国家−地球大に至る人間居住の問題に関し、指導者C.A.ドクシアディス（私の滞在中に死亡されましたが）を中心に世界各国から学際的に研究者が集まって討論し、一定の成果を上げて来たところであり、かつWorld Society of EKISTICSの事務局を兼ね、世界中のこの方面の学者、計画家の溜まり場となっていたところです。

私はここで机を与えられ、前半はこの研究所の20年来の成果を印刷物によって、かつ各国の研究者と話すことによって学習しました。そしてその結果と私自身の今までの研究結果をつき合わせ、シンポジウム（７月14日から２週間アテネにおいて行われたものでトータルのテーマはAction for Human Settlements）で発表したりしました。

この会議は各国から100名ほどの学者が集まって、現在の地球大の住問題を論じたもので、その成果は同年5月31日からカナダのバンクーバーで開かれた国連ハビタット第１回人間環境会議に反映されました。

私はこの時のシンポジウムで各国多数の研究者と知り合うことができ、そのネットワークに乗ってその後、方々の国を訪ねた際、研究面や生活面で少なからず便宜を与えられました。なにしろ古代ギリシャの都市国家の中心都市アテネは、ヨーロッパの国のかたちや思想の源基ともいえ、これを象徴するアクロポリスの丘に建つパルテノン神殿は、建築としても古代において人間尺度を写し取った源基でもあります。私はＡＣＥのあるリカベトスの丘から日々これを見ておりました。ギリシャはまた古代の後、即ち中世期はビザンチン的世界となりますが、その典型、アトス山（この千年来世俗を排し、機械を排し、自然を相手に暮らしている人間集団、修道士たちの半島）を訪れる機会を得ました。そこでは機械なしにでも生活できること、20ほどもある修道院がそれぞれ個性的で、機械は人間の

生活環境を画一化するということが実例的に理解されました。

ギリシャに集まり、故人となったＷＳＥのメンバー達

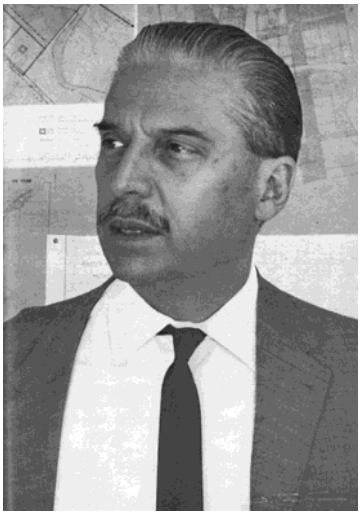
西欧文明の発祥の地ギリシャは、アテネのリカヴィトスの丘に集って、地球における人間居住の過去と未来に関心を持って研究したＷＳＥの人達の多くは他界してしまいました。2017年のこの夏、ポソモポラスの訃報に重ねて、改めて故人となったＷＳＥの個性的で情熱的な人達の人間居住－地球共同体についての心配と希望についての活動と研究が想い出されます。

C.A.ドクシアディス（1913～1975）

EKISTICS（ギリシャ語で人間居住の意）を研究対象とし、学際的、国際的研究の場、ＷＳＥを創設したのがドクシアディスです。彼は建築から出発し、学位論文はアテネ・アクロポリスに残るパルテノン神殿の実測でした。

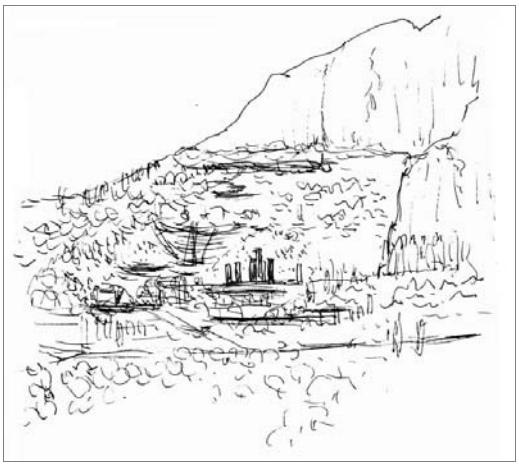
彼の代表的な著書である、エクメノポリス（ECUMENOPOLIS－The Inevitable City of Future）は、地球における人間居住を、人間個人から家族、近隣、村、町、都市、都市圏、大都市圏、エクメノポリス－地球に広がる世界都市に階層分類し、その未来的課題を記述したものです。ドクシアディスはアテネに建築・都市設計の事務所を持ち、国内外に仕事を広げておりましたが、ドクシアディスの研究所の壁には、幾枚もの世界地図が貼られていたことを思い出します。有限な地球に人口が爆発的に増大、拡大する状況をユートピア（幸福な都市）か、ディストピア（死の都）かとデルフォイの神殿に神託を求めたと、苦悩する文章も残っています。

写真３ C.A.ドクシアディス氏



ドクシアディスの大きな業績は世界的に学際的研究者、実務家を集め、かつてル・コルビジュエ達の創った近代都市のあるべきかたちを求めたアテネ憲章（1933）に続く、地球居住のあり方について議論の場をギリシャをベースにデロス会議として設けたことです。第１回デロス会議は1963年でしたが、1974年まで毎年エーゲ海のデロス島で続けられ、ドクシアディスの没後（1975）は各国持ち回りでＷＳＥの研究会が続けられています。

図３ デルフォイの神殿



注：ギリシャは世界の中心と信じたデルフォイ。アポロンの神託は未来を予言する。ここをしばしば訪れた**C.A.ドクシアディス氏**は、未来は「ユートピア」か「ディストピア」かと神託を求めていた。

（戸沼幸市スケッチ帳より）

J.ゴッドマン（1915～1994）

ＷＳＥの主力メンバーであり会長も務めたフランスの人文地理学者であるゴッドマンは、1994年地域社会研究所（現在、一般財団法人第一生命財団に統合）の30周年記念に研究所の招きで来日し、「メガロポリスを越えて」と題する、氏、最期の言葉を残しています。

1962年に出版したゴッドマンの著作「メガロポリス」は、アメリカ大西洋沿岸地方の大ボストン圏からワシントン大都市圏までの20世紀後半の都市の巨大化現象を鋭く解明したもので、この著作は日本の東海道メガロポリス論にも大きな影響を与えました。

磯村英一さんが司会で私も聞いているゴッドマンの「メガロポリスを越えて」の講演では、ＷＳＥの研究テーマ、地球居住における人類の一体化の結果である世界共同体（A World Community）の好ましい出現を強く期待したものです。しかしその前途に横たわる難問－人々の地域や国を超えた自由な移動に対する伝統的地域社会の反力、宗教、国籍、人種などによる国家構造の断片化にどの様に対処すべきかについて言及しています。「世界平和は前代ほどではないけれど、20世紀後半に入っても非常に頻繁に脅かされる」とのゴッドマンの指摘は、局地戦争、紛争の多発など、21世紀初頭の地球居住－世界の状況でもあります。

リチャード・バックミンスター・フラー（1895～1983）

地球の形をイメージさせるフラードーム（デザイン・建築の分野でジオデシック・ドーム）で有名な建築家、技術家フラーも、デロス会議、ＷＳＥの熱心なメンバーでした。「宇宙船地球号」は人類・人間居住のイメージを端的に言い当てています。私は1975年のデロス会議で１週間一緒でしたが、参加者があちこち見学、観光している間、ギリシャの島の道端の石に腰掛けて分厚い本に読みふけっている姿が心に残っています。

磯村英一（1903～1997）

磯村英一先生は1963年に開催された第１回デロス会議以来のＷＳＥの主要メンバーであり、東アジア、日本からの初めて会長に選出された実績を持ちます。

私が初めて磯村先生に知遇を得たのは、1970年の政府主催の21世紀の日本の国家と国土像を求めたコンペティションの各チーム発表の時でした。私は早稲田大学チームでしたが、磯村先生は東京大学チームで、相互に21世紀日本のイメージを議論したことが思い出されます。戦後、いち早く磯村先生は富士山麓首都移転説を唱えていました。そしてＷＳＥに並んで日本居住学会を立ち上げ、私が事務局を引き受けて学際的に人間居住の問題を追及した時期もありました。1985年の’85つくば科学博覧会で国際シンポジウム「人間と居住」では、故下河辺淳氏の呼びかけに応じて日本居住学会は全面的に協力したことでした。

晩年、東洋大学学長時代、アジア地域の人間居住問題に取り組んでおりました。

アーノルド・トインビー（1889～1975）

大著『歴史の研究』を残したイギリスの歴史家トインビーも、ドクシアディスの立ち上げたデロス会議、ＷＳＥの展開に協力しています。トインビーの歴史研究のフィールドとして、当然のことながら古代中世のギリシャ

史は重要な位置を占めており、若い時分にギリシャやイタリアに遊学しています。西欧の原型は古代ギリシャにあるのではということについて、私がギリシャを選んだこととも重なります。

トインビーの世界文明の興亡の解明は興味深いものがあります。地球における人間居住を文明単位で記述し、世界都市という未来、21世紀につながる概念を打ち出しています。日本にも馴染みが深く、1956年京都を訪れ、江戸時代の鎖国から開国に向かう日本論に独特な見解を示しています。

ジャクリーン・ティルウィット（1905～1983）

『ユートピア』の著者、トマス・モアの子孫。1955～69、ハーバード大学教授（都市計画）を勤めています。

戦前、戦後を通じて、ル・コルビジュエ達を助け、ＣＩＡＭの出版物の編集。1955年、ドクシアディスと共同で、月刊誌「エキスティクス」を創刊。ドクシアディス後の国際的に広がるエキスティクスの成長をポソモポラスとともに支えました。私のギリシャ滞在中、私の著作「人間尺度論」の英訳「Theory of Human Scale」などをエキスティクスに掲載してくれました。彼女は1983年に亡くなりましたが、アテネの郊外、バイアニア村の丘に建つセルト設計の自宅に何度か招かれ、エキスティクスについて話してくれたことが思い出されます。

ＷＳＥには第２次世界大戦後、世界中から多くの研究者が人間居住の平和な在り方を求めて集まりましたが、私などとも交流のあった多くの方々が他界しました。

戦後７２年、夏－平和への願い

昨今、グローバルな情報が私どもにも間断なく、新聞、雑誌、テレビ、ネット、そして人伝に届きます。

アメリカ白人至上主義者団体と反対派の衝突、それに対するトランプ大統領の「両者に非」とのコメント、続いて子どもの時に親に連れられて米国に移り、そのまま暮らす移民の若者を対象にした移民救済制度の撤廃発表、移民の国アメリカはどこに向かうのか。

ＥＵ・欧州連合－イギリス・メイ首相の与党、保守党が過半数割れ（6月）、フランス・マクロン大統領の新党国民議会、選挙で単独過半数に（6月）、Ｇ２０サミット、アメリカ抜きでパリ協定で結束（7月）、先進欧米諸国はグローバル化と反グローバル化の狭間で大きく動き、様々なかたちの分断・亀裂現象を表出させている様子です。

スペイン・カタルーニャ州のテロ事件、サグラダ大聖堂のあるバルセロナ市街では、ワゴン車の暴走で13人死亡100人超負傷(8月)。イスラム国（ＩＳ）の領域、モスル壊滅、市民を巻き込んだ悲惨な戦場ネットで流れる(8月）。ＩＳはグローバル時代のネットを利用して、各所に拠点を築くとの報道もあります。

朝鮮半島南北の分断のままに北朝鮮、ＩＣＢＭ（大陸間弾道ミサイル）を発射、日本列島上空を越えてグアム島に達する能力を誇示（7月）、続いて襟裳岬の東方太平洋上に落下（8月）、更に６回目の核実験実施（9月）。これに対して米韓軍事演習、韓国ＴＨＡＡＤ（終末高高度防衛ミサイル）暫定配備と報じられています。

日本をも巻き込んで核戦争をイメージさせる事態です。

ともかく北朝鮮を取り込んで米、韓、日、中国、ロシアによって話し合いで事態を解決してほしいものです。

第二次世界大戦後、21世紀に入って地域的戦争・紛争は続いています。地球居住を覆うグローバル化の21世紀初頭、世界の大国は核兵器を保有しているという現実があります。

戦後72年、８月は日本として改めて戦争と平和について考える時です。８月６日の広島原爆投下、８月９日長崎原爆投下は、戦争、とりわけ原子爆弾使用の残忍を示すものでした。二つの都市で行われた追悼式典では、両市の市長が死者への鎮魂、平和への願いとともに、国連での日本の核禁止条約不参加は理解できないと述べています。

そして８月15日は日本における終戦記念日です。今年のこの日も72年前と同じように、蝉がいっせいに鳴いておりました。

写真４　全国戦没者追悼式の天皇・皇后両陛下

全国戦没者追悼式で「おことば」を述べた後、一礼する天皇、皇后両陛下＝15日午後０時４分、東京都千代田区、西畑志朗撮影

出典：朝日新聞デジタル版

今年も東京の全国戦没者追悼式には天皇・皇后両陛下が出席され、犠牲者を追悼され平和への強い思いを述べられました。戦後日本の平和憲法の定めた平成、象徴天皇の最後の言葉となるのでしょうか。

日本の近代は、明治・大正・昭和とつづき、世紀を跨いで平成29年になりました。年初には、平成31年１月１日に天皇生前退位が行われ、新年号（元号）に入る方針が明らかになり、否応なく憲法問題が国民的議論の場に供される政治的状況となる気配です。21世紀の基本的な日本のかたちが問われる事態です。

2017年夏の日本列島は雨がちの天気でしたが、夏恒例の全国高校野球選手権大会が、3,839チームが参加して行われ、埼玉県代表の花咲徳栄高校が優勝し、10代の強壮な肉体の躍動を見せてくれました。今年で戦争を挟んで99回目になるそうです。陸上男子100メートル桐生祥秀（東洋大）、日本人初の9秒台（9.98）とは快挙です。

私の2017年の夏は、ギリシャ人・ポソモポラスの訃報に接し、第２次世界大戦後ＷＳＥ（世界人間居住学会）に集った人々の、地域社会、国家、世界の人間・人類社会のあり方、平和共存への願い、熱い想いを改めて思い返し、これを今、日本を含め世界の各地で起きている活動や考え方に重ねて、時代の動き、国のかたち、地球居住のかたちを想像してみております。ドクシアディス流にいえば、未来は「ユートピア」か「ディストピア」か？あるいは「ディストピア」を含む「ユートピア」か？その逆か？

【参考文献】

1．『人間と居住』EXPO'85国際シンポジウムレポート（財）国際科学技術博覧会協会、1985
2．グローバリゼーションとローカルアイデンティティ』EKISTICS（世界エキスティクス学会）2005、彦根大会報告書、WSE EKISTICS Vol.73
3．『「メガロポリス」を越えて-J.ゴッドマン教授最後の言葉』財団法人地域社会研究所、1994.9
4．『都市憲章』磯村英一、SD選書136、鹿島出版会、1978.6
5．『新しい都市の未来像』ドクシアディス、磯村英一、鹿島出版会、1965.6
6．『図説　歴史の研究Ⅰ.Ⅱ.Ⅲ.』A.トインビー、桑原武夫他訳、学習研究社、1976.11
7．『EKISTICS 特集 人間環境を考える　C.A.ドクシアディス追悼号』SD、1976.7

(2017.09.10)